

突・指竿、前々之通御免被遊候。

九月

別紙若年寄中紙面之寫指越候條、被得其意、組・支配之面々
に可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配に茂相違
候様被申聞、尤同役中可有傳達事。

九月廿日

本多安房守

上口往還より山手、毎歳十月朔日より翌年二月迄、御家中
之面々唯今迄諸殺生御免場候得共、御代替に付追而申達候
迄、罷出不申様御申觸可被成候事。

西十一月

別紙若年寄中紙面之寫指越之候條、家來末々迄可被申渡
候。組等之内裁許有之面々は、其支配に茂相觸候様被申聞、
同役中可有傳達事。

右之趣可被得其意候。以上。

十一月十七日

前田大炊

上口往還道より山手之方伏見川を限り、西は中村用水を限

り、毎歳十月朔日より翌年二月晦日迄、御家中之面々鷹井
雉子突・指竿、前々之通御免被遊候事。

戊八月

別紙若年寄中紙面寫相越之候條、被得其意、組・支配之面
々可被申渡候。組等之内裁許有之人々は者、其支配に茂相
違候様被申聞、同役中可有傳達事。

八月廿八日

長九郎左衛門

御家中之面々、諸殺生御免場之内に而、網懸もち、或八寸
以上之申指、且又三里四方天網張小鳥捕候儀、先規より御
停止之所、右之族有之由專風聞有之候。御免場に而は不苦
様に、末々心得違之者共有之躰候。以來右之場所に茂御歩
横目等相廻、且百姓共茂申渡、右之族有之においては見
咎、急度曲事可被仰付候條、此旨御家中一統家來末々迄、
堅申付置候様に御申觸可被成候事。

甲戌十月

別紙若年寄中紙面之寫相越之候條、被得其意、組・支配之面
々可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配に茂相違

候様被申聞、同役中可有傳達事。

十月十七日

奥村主水

御家中一統、毎歳十月朔日より翌年二月晦日迄、上口鷹
等御免場可被差止旨被仰出候條、夫々御申觸可被成候
事。

子十一月

別紙若年寄中紙面之寫相越之候條、被得其意、組・支配之
面々可被申渡候。組等之内裁許有之人々は、其支配にも相
違候様被申聞、同役中可有傳達事。

十一月十一日

横山大膳

御家中之面々、諸殺生御免場之内に而、懸もち、或八寸以
上之申指、且又三里四方天の網張小鳥捉候儀、先規より御
停止候所、右之族有之由、專風聞有之候。御免場に而不苦
様に、末々心得違之者茂有之躰に候。以來右場所に茂御歩
横目等相廻、暨百姓共茂申渡、右之族於有之者見咎、急
度曲事可被仰付旨、寶曆四年一統相觸候得共、今以右之族

有之旨甚風聞に付、猶更御歩横目等相廻見咎候様申渡候
條、此旨重而御家中一統家來末々迄堅申付候様、御申觸可
被成候事。

壬午十一月

別紙若年寄中紙面之寫相越之候條、可被得其意候。

十一月十七日

村井又兵衛

一二 宗門之儀御定

覺

一、吉利支丹宗門之儀、密々今以可有之候之旨。家中之輩
中間・小者に至迄、常々無油斷可被申付候。勿論奉公人出替
之刻は、請人に念を入、宗旨を改可被相抱事。

一、百姓・町人者、五人組且那寺を彌相改、不審成宗旨於
有之者、可被遂穿鑿事。

一、吉利支丹御制禁之高札、明暦元年八月相立候。經年序
文言見兼可申候。新敷書直可被立事。

萬治二年六月十九日